

学園祭協賛行事 フォーラム 学生と図書館

〈私のアルバイトは「インターンシップ」
一心を動かされた貴重書との出会い〉

10月31日（月）に本学図書館で学園祭協賛行事の一環として、フォーラム 学生と図書館〈私のアルバイトは「インターンシップ」一心を動かされた貴重書との出会い〉を本学図書館第2閲覧室で開催いたしました。その時に出席して頂いた本学学生4人の発表をもとに図書館フォーラムを振り返ります。



阿部 桂子さん
(英米語学科4年次生)

「日本人の見た西洋・西洋人の見た日本」

私は図書館報193号の「案内絵ハガキから見た貴重書展のイメージ(9)」において、平成8年に開催された貴重書展「文化交流史展－日本人の見た西洋・西洋人の見た日本－」について原稿を執筆しました。この貴重書展の中から、私が特に興味を持った大槻玄沢の『蘭学階梯』、ジェームズ・カーティス・ヘボンの『和英語林集成』について取り上げましたが、ここで改めてこの2冊の書物についてご紹介します。

初めに『蘭学階梯』です。著者の大槻玄沢は江戸時代後期の蘭学者であり、大槻は『解体新書』の翻訳で有名な杉田玄白と前野良沢の弟子にあたります。彼の代表作であり、文字通り「蘭学へ登る階段椅子」と名付けられたこの『蘭学階梯』は、2巻に渡って日蘭通商と蘭学の歴史や、オランダ文法の初歩について書かれています。この『蘭学階梯』は日本で初めて発行された蘭学入門書であり、江戸時代を通じて蘭学を学ぶ人々の間に普及し、多大な影響を与えたと言われています。

続いて、ジェームズ・カーティス・ヘボンの『和英語林集成』です。著者のヘボンは、米国長老派教会系医療伝道宣教師として安政6(1859)年に来日しました。しかし、彼が来日した当時の日本は攘夷運動が盛んで、キリスト教の公然とした布教も禁止されており、外国人殺傷事件が頻発していたそうです。そんな自身の身も危ぶまれる中、ヘボンは宿所「成仏寺」で日本語の研究と病人の看護にあたります。そして慶応3(1867)年、岸田吟香の協力のもと『和英語林集成』を発行し、日本初の和英辞典を誕生させたのです。その内容は当時の日常語を中心に編纂されており、19世紀後半の貴重な日本語資料としての価値も持ち合わせています。さらに日本語の発音表記として、初めて「ヘボン式ローマ字」が使用されました。今や有名な「ヘボン式ローマ字」はこの辞書から生まれたのです。

私自身、外国語を一から学ぶ時、辞書や入門書の存在がどれほど重要であるか痛感しています。なにか「指標」となるものがなければ、今まで触れたことのない言語を学び習得することは非常に困難となるからです。大槻とヘボン、彼らは両者ともに未開の外国語研究を行い、後世に伝えました。その苦勞と努力を思うと、現在の私達は本当に恵まれた環境にあると思います。彼らの未知の物事と向き合い、深く探求する姿勢に感銘を受けました。

今回の図書館報の原稿を執筆する過程で、今まで知らなかった先人たちの軌跡に触れ、大変意義のある知識を得られたと思います。また、本の内容はもとより著者の出生やその時代背景にも触れて、読む方に興味を持って頂けるように工夫しました。このことより、ひとつの物事に多方面からアプローチし、その中で本当に必要な情報を選択できる力がついたと思います。